

北原白秋作

とんぼの眼玉

朗読 平出鏡子

第四卷 4. 北原白秋「とんぼの目玉」



北原白秋（きたはら はくしゅう）  
1885年（明治18） - 1942年（昭和17）福岡県生まれ。早稲田大学英文科  
中退。

キリシタンや南蛮文化など、異国情緒豊かな水郷・柳川の恵まれた環境で幼少期を  
過ごし、中学時代から詩や短歌に親しみ頭角を現わす。1908年には吉井勇、木下  
杢太郎らと「パンの会」を創立、耽美派文学の拠点となる。第一歌集「邪宗門」は象  
徴詩の新境地を開くものとして話題を集め、1911年の抒情小曲集「思ひ出」で歌謡作者として  
の素質も示した。この間、生家の破産や恋愛事件等人生上の試練に遭い、貧窮と苦悩のうちに転居  
をくりかえし、詩風も変化し、次第に「自然」を慕うようになって行くが、鈴木三重吉の児童文学  
雑誌「赤い鳥」によって、創作童話、創作民謡にも新風を吹き込んでいく。  
本編では「蜻蛉の目玉は大かいな、地球儀の目玉、忙しな目玉、目玉の中に、小人が住んで、眼鏡  
で、あつちこつち覗く」と詠い、作者は子供に還らなければ自然の大切さがわからない述べ、子供  
心で童謡を作ることの重要性を訴える。発表は1919年（大正8）。

「用語解説」

鵝毛（がもう）

鵝鳥（がちょう）の羽毛。極めて軽いものの例え

雁来紅（はげいとう）

ヒユ科の観賞用一年草。葉鶏頭

木履（かっこ）

駒下駄（台も歯も一つの材で作った下駄）

山火事焼けるな、ホウホケキヨ、

可愛い小鹿が焼け死ぬぞ。

これは春の暮、夏のはじめの頃に、夕方かけて、赤い山火事の火の燃える箱根あたりの山を眺めて、小田原の町の子供たちが昔歌った童謡の一つだと申します。

昔の子供たちはかういふ風におのづと自然そのものから教はつて、うれしいにつけ悲しいにつけ、いかにも子供は子供らしく手拍子をたたいて歌つたものでした。

それが、この頃の子供たちになると、小さい時から、あまりに教訓的な、そして不自然極る大人の心で咏まれた学校唱歌や、郷土的のにはひの薄い西洋風の翻訳歌調やに圧えつけられて、本然の日本の子供としての自分たちの謡を自分たちの心からあどけなく歌ひあげるといふ事がいよいよ無くなって来てゐるやうに思ひます。

今の子供たちはあまりに自分の欲する童謡やその他を、その学校や親たちから与へられ

て居りません。それは今の世の中があまりに物質的功利的であるからでもあります。

私たちの子供の頃は今から考へましても、それはなつかしい情味の深いものでした。あの頃子供であつた私たちがいかほど大人になりましたも、いつまでも忘れられないのは、幼い時母親や乳母たちからきいたあの子守唄の節まはしです。

でんでん太鼓に笙の笛のあの「ねんねのお守は何処へ行た。」や、山では木のかず萱のかず、天へのぼつて星のかずの「坊やのかはいさ限りない。」や、十三七つの「お月さま」や、十五夜お月さま見て跳ねるのあの「ううさぎ兎」や、こつちの水は甘いぞ、あつちの

水は苦いぞの「赤い帽子の螢」や、一羽の雀が云ふことにあの「三羽の小さな雀」の謡や、思ひ出せば数かぎりもありません。

あの野山の木萱のそよぎからおのづと湧いて出たと云ふ民謡や、かうした純日本の童謡やが、次第に廃れてゆく心細さはありません。私は一方にさうしたいつまでも新らしい、

而かも日本人としての純粹な郷土的民謡を復興さしたいと云ふ考を持つてゐますにつれて、おなじやうにかうした童謡をも今の無味乾燥な唱歌風のものから元の昔に還さなければならぬと思つてゐます。さうしてその本然の心を失はないで、さらに新らしい今の日本の童謡をもその上に築き上げなければならぬと願つてゐます。

ほんたうの童謡は何よりわかりやすい子供の言葉で、子供の心を歌ふと同時に、大人にとつても意味の深いものでなければなりません。然し乍ら、なまじ子供の心を思想的に養はうとすると、却つて悪い結果をもたらす事が多いのです。それであくまでもその感覚から子供になつて、子供の心そのままな自由な生活の上に還つて、自然を觀、人事を觀なければなりません。

子供の感覚が、どんなに鋭く、新らしいか、生きてゐるかと云ふ事について、一例をあげますと、子供はあの陰鬱な灰色の空から、初めて鮮かな白い雪の粉がチラチラと降り出

しでもして来ますと、それは喜び勇んで、小躍りしながら、かう歌ひます。

雪花ふるわな、

空に虫が湧くわな、

扇腰にさいて、

きりりつと舞ひましょ。

これを大人に咏ませると、「雪は鵝毛に似て飛んで散乱し。」と歌ひます。子供は空に湧く白い粉雪の一片一片を今生れたばかりの活きた羽虫の一匹一匹として喜び、大人は死んだ鵝鳥のそのむしり散らした羽毛の一片一片に譬へて観賞します。子供の感覚は生きて動き、大人の感覚はその智慧から先づ盲にされて死んで了つてゐます。大した違ひではあるまいかと思ひます。

子供に還ることです。子供に還らなければ、何一つこの忝い大自然のいのちの流をほん

たうにわかる筈はありません。

「子供は大人の父だ。」と申す事も、この心をまさしく云つたものに外なりません。私たちはいつも子供に還りたい還りたいと思ひながらも、なかなか子供になれないので残念です。

私の童謡に少しでもまだ大人くさいところがあれば、それは私がまだほんたうの子供の心に還つてゐないのです。さう思ふと、子供自身の生活からおのづと言葉になつて歌ひあげねばならぬ筈の童謡を大人の私が代つて作るなどと云ふ事も私には空おそろしいやうな気がします。然し、私たちから先づ、その子供たちのさうした歌ごころを外へ引き出してあげる事も必要だと思ひます。さういふ心で私は童謡を作つて居ります。

## 蜻蛉の眼玉

蜻蛉の眼玉は大かいな、

銀ピカ眼玉の碧眼玉、

円るい円るい眼玉、

地球儀の眼玉、

忙しな眼玉、

眼玉の中に、

小人が住んで、

千も万も住んで、

てんでんに虫眼鏡で、あつちこつち覗く。

上向いちやピカピカピカ。



下向いちやピカピカピカ。

クルクル廻しちやピカピカピカ。

玉蜀黍に留れば玉蜀黍が映る。

雁来紅に留れば雁来紅が映る。

千も万も映る。

綺麗な、綺麗な、

五色のパノラマ、綺麗な。

ところへ、子供が飛んで出た、

藜棹ひゅうひゅう飛んで出た。

さあ、逃げ、

わあ、逃げ、

麦桿帽子が追つて来た。

千も万も追つて来た。

おお怖、

ああ怖。

ピカピカピカピカ、ピツカピカ、

クルクル、ピカピカ、ピツカピカ。

## 雨

雨がふります。雨がふる。

遊びにゆきたし、傘はなし、

紅緒の木履も緒が切れた。

雨がふります。雨がふる。

いやでもお家で遊びませう、

千代紙折りませう、たたみませう。

雨がふります、雨がふる。

けんけん小雉子が今啼いた、

小雉子も寒かる、寂しかる。

雨がふります。雨がふる。

お人形寝かせどまだ止まぬ。

お線香花火もみな焚いた。

雨がふります。雨がふる。

昼もふるふる。夜もふる。

雨がふります。雨がふる。

### 赤い鳥小鳥

赤い鳥、小鳥、

なぜなぜ赤い。

赤い実をたべた。

白い鳥、小鳥、

なぜなぜ白い。

白い実をたべた。

青い鳥、小鳥、

なぜなぜ青い。

青い実をたべた。

あわて床屋

春は早うから川辺の葦に、

蟹が店出し、床屋でござる。

チヨツキン、チヨツキン、チヨツキンナ。

小蟹ぶつぶつ石鹼を溶かし、

親爺自慢で鋏を鳴らす。

チヨツキン、チヨツキン、チヨツキンナ。

そこへ兎がお客にごさる。

どうぞ急いで髪刈つておくれ。

チヨツキン、チヨツキン、チヨツキンナ。

兎ア気がせく、蟹ア慌てるし、

早く早くと客ア詰めこむし。

チヨツキン、チヨツキン、チヨツキンナ。

邪魔なお耳はぴよこぴよこするし、

そこで慌ててチヨンと切りおとす。

チヨツキン、チヨツキン、チヨツキンナ。

兎ア怒るし、蟹ア恥よかくし、

為方なくななく穴へと逃げる。



チヨツキン、チヨツキン、チヨツキンナ。

為方なくなくと穴へと逃げる。

チヨツキン、チヨツキン、チヨツキンナ。

## 物臭太郎

物臭太郎は朝寝坊、

お鐘が鳴つても目がさめぬ、

鶏が啼いてもまだ知らぬ。

物臭太郎は家持たず、

お馬が通れど道の端、

お地頭見えても道の端。

物臭太郎はなまけもの、

お腹が空いても臥てばかり、

藪蚊が螫しても臥てばかり。

物臭太郎は慾しらず、

お空の向うを見てばかり、

桜の花を見てばかり。